

## 大学及び中学柔道選手の投げ技における 得意技習得に關与する要因

村瀬智彦※(大阪大学健康体育部) 出村慎一(金沢大学教育学部)  
井浦吉彦(金沢大学教育学部) 村松成司(千葉大学教育学部)  
浅見高明(筑波大学体育科学系)

### I 緒言

運動技術が習得される過程には様々な要因が關与すると考えられる。同様に柔道競技における投げ技の習得においても、柔道選手自身の特性に關わる要因、投げ技の特性に關わる要因、あるいは柔道選手を取り巻く環境に關わる要因等が關与することが示唆されている<sup>2,5,18)</sup>。そのため、先行研究では異なる得意技を有する柔道選手と諸特性との關係を検討した研究及び得意技の習得過程に關与する要因の解明を試みた研究が認められる。

得意技の種類と諸特性との關係を検討した研究では、得意技の異なる柔道選手間において体格・形態<sup>4,8,9,13,16,17,19)</sup>、体型・姿勢<sup>23)</sup>、体力・運動能力<sup>4,10,22,24)</sup>、心理特性<sup>11,21)</sup>、行動特性<sup>10,12)</sup>、筋電図特性<sup>14)</sup>の比較が行われており、今日までに得意技の異なる柔道選手の各特性が明らかにされている。また、得意技の習得過程に關与する要因を検討した研究では、得意技選択に關与する諸要因<sup>7,9,19,20)</sup>や決定要因の關与の程度<sup>1,2,3,5,18)</sup>が報告されている。

一方、得意技の経年的変化を調べた研究<sup>6)</sup>では、中学生の段階で得意技を習得した場合、得意技の種類は以後3年間はほとんど変化しないが、その後変化することが示唆されている。しかし、従来の研究における対象者は、高校<sup>9,10,11,13,14)</sup>及び大学<sup>2,5,8,16,21,22,24)</sup>柔道選手が大部分を占め中学柔道選手を対象とした報告<sup>18,20)</sup>は少ない。故に、技能水準の異なる柔道選手の得意技習得に關与する要因とその關与の程度における差異は明確にされ

ていない。

本研究では、得意技の習得段階及び技能水準の異なる大学柔道選手と中学柔道選手を対象として投げ技における得意技の決定要因に關する調査を行い、大学柔道選手と中学柔道選手の得意技習得に關与する要因とその關与の程度を明らかにするとともに、技能水準の異なる柔道選手間における關与の程度の比較検討を行うことを目的とした。

### II 方法

#### 1. 調査対象

調査対象は、全国大会への出場経験を有する大学男子柔道選手 368 名及び中学男子柔道選手 128 名であった。調査用紙には回答の矛盾を検出する項目<sup>20)</sup>が含まれており、データの信頼性を高める目的で回答に矛盾が認められた対象者は分析データから削除した。分析に用いた対象者は、大学柔道選手 333 名及び中学柔道選手 97 名であった。大学及び中学柔道選手の年齢、身長、体重、段位、経験年数は表 1 に示す通りである。

#### 2. 調査内容

調査内容は、得意技名(最も得意とする投げ技名)とその得意技の選択において決定要因として關与すると考えられる各要因の關与の程度を回答するものであった。先行研究<sup>7,9,19,20)</sup>と予備調査を通して、得意技の選択に關与すると考えられる 43 要因が選択された。43 要因は、柔道選手自身の特性に關する要因として、体格特性に關する要因、機能特性に關する要因、心理特性に關する要因、及び経験に關する要因、さらに技の特性に關する要因、柔道選手を取り巻く環境要因の 6 つのカテゴリーに分類される(表 2)。關与の程度は、「非常に關係ある(2点)」「關係ある(1点)」「どちらともいえない(0点)」「關係ない(-1点)」

※ 〒560 大阪府豊中市待兼山町 1-17  
大阪大学健康体育部  
電話 06-850-6035

Table 1 Characteristics of subjects

Group		Age (yrs)	Height (cm)	Weight (kg)	Dan (dan)	Experience (yrs)
UC-judoists (n=333)	Mean	20.2	174.0	84.5	2.3	8.8
	SD	1.2	5.8	17.5	0.6	3.0
JHS-judoists (n=97)	Mean	14.9	169.1	74.6	0.9	5.8
	SD	0.4	5.9	17.6	0.3	2.8

UC-judoists: university or collegiate judoists, JHS-judoists: junior high school judoists

Table 2 Category and factor

<u>Physique attributes of the judoist</u>	<u>Functional attribute of judoist</u>	<u>Mental attribute of judoist</u>
height	grip strength	personality
upper limb length	arm strength	judgment
lower limb length	leg strength	
weight	flexibility	
upper limb girth	endurance	<u>Experience of judoist</u>
lower limb girth	coordination	results of past contests
shoulder width	agility	amount of practice
body type	stability	learning order of technique
	preferred hand	
	skill level	
<u>Characteristic of the technique</u>		<u>Circumstance of judoist</u>
feeling of throwing	difficulty of scoring points	advice of coach
related injuries	way of gripping	advice of teammates
practice method	fighting posture	kinds of technique used by teammates
way of breaking balance	appearance of throwing	body types of teammates
way of attacking	combination with another technique	skill level of teammates
ways of counterattacking	difficulty of throwing	tradition of team
difficulty of scoring ippon		influence of famous judoist

「全く関係ない（－2点）」の5段階で評価した。

### 3. データの分析方法

得意技の種類と割合は大学柔道選手と中学柔道選手において別々に集計した。講道館の定める技の正式名称<sup>15)</sup>においては、双手（二本）背負投と一本背負投は区別されておらず「背負投」として統一されているが、両者の投げ技が得意技として習得される頻度は大きいため、本研究では両者を区別して集計した。各要因の得意技選択における関与の程度は要因ごとに平均値を算出して評価した。要因ごとに標準偏差が異なるため、標準偏差（SD）を基準に関与の程度を段階的に評価した。つまり、値が0.5 SD以上1 SD未満の場合に関

与の大きな要因、1 SD以上の場合に関与の非常に大きな要因として評価した。同一要因の関与の程度における大学柔道選手と中学柔道選手間の差異はt検定を用いて明らかにした。さらに、統計的に有意な差異が認められた要因については、平均値間の差異と比率を算出し、技能水準の向上に伴う関与の程度の増減量と変化率について検討した。

### III 結果

#### 1. 大学及び中学柔道選手の得意技の種類と割合

図1は、大学柔道選手と中学柔道選手における得意技の種類とその割合を示したものである。得意技として比較的高い頻度で選択されている投げ

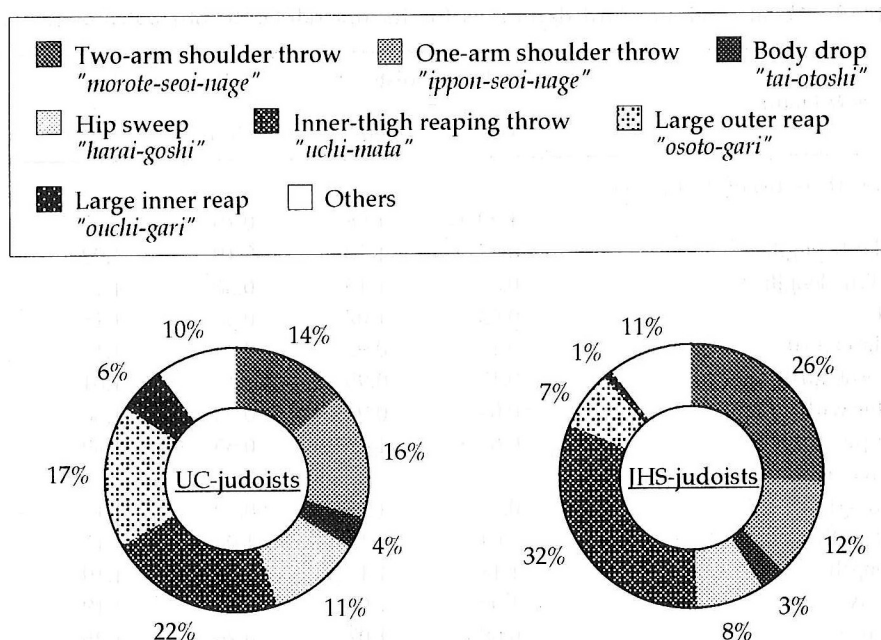


Fig.1 Percentage of favorite throwing technique in university or collegiate judoists (UC-judoists) and junior high school judoists (JHS-judoists)

技は、双手背負投（大学柔道選手14% / 中学柔道選手26%），一本背負投（16% / 12%），体落（4% / 3%），払腰（11% / 8%），内股（22% / 32%），大外刈（17% / 7%），大内刈（6% / 1%）であった。その他の技には，大学柔道選手では，小内刈（2%），小外刈（1%），巴投（1%），跳腰（1%）が含まれていた。また，中学柔道選手では，釣込腰（3%），支釣込足（2%），掬投（2%）が含まれていた。

大学柔道選手と中学柔道選手を比較すると，中学柔道選手では双手背負投と内股の2つの技で全体の半分以上の割合（58%）を占め，それ以外の技の割合との間に大きな差異が認められたのに対し，大学柔道選手では得意技別の割合における差が相対的に小さかった。

## 2. 柔道選手の特性に関する要因における値と検定結果

柔道選手自身の特性に関する各要因における平均値と標準偏差及び大学柔道選手と中学柔道選手間での平均値の差異の検定結果は表3に示す通りである。柔道選手の体格特性に関する8要因にお

いては，大学及び中学柔道選手に共通して身長と体型の2要因において0.5 SD（標準偏差）以上の値が認められた。さらに，大学柔道選手では，上肢長，下肢長，体重の3要因においても0.5 SD以上の値が得られた。大学柔道選手と中学柔道選手の間で関与の程度に統計的に有意な差異が認められたのは，身長，上肢長，下肢長，体重の4要因であり，大学柔道選手の方が大きな値を示していた。

機能特性に関する10要因においては，中学柔道選手の利き手の要因における値を除く全ての値が0.5 SD以上であった。大学柔道選手と中学柔道選手の間で関与の程度に差異が認められたのは敏捷性の要因においてのみであり，大学柔道選手の値の方が大きかった。また，大学柔道選手の敏捷性の要因における値は43要因の中で最高値であった。

心理特性に関する2要因においては，大学柔道選手及び中学柔道選手における関与の程度が類似しており，両者間では関与の程度に統計的に有意な差異は認められなかった。

Table 3 Means and standard deviations for factors related to attributes of judoist

Category & factor	UC-judoists		JHS-judoists		t-test
	Mean	SD	Mean	SD	
<u>Physique attributes of the judoist</u>					
height	1.20 ++	1.08	0.78 +	1.20	**
upper limb length	0.57 +	1.10	0.19	1.02	**
lower limb length	0.68 +	1.10	0.36	1.15	*
weight	0.63 +	1.07	0.38	1.18	*
upper limb girth	0.16	0.95	0.29	1.14	
lower limb girth	0.15	0.95	0.15	1.01	
shoulder width	0.09	0.92	0.06	1.04	
body type	0.65 +	1.05	0.55 +	1.09	
<u>Functional attribute of judoist</u>					
grip strength	0.85 +	1.13	0.79 +	1.15	
arm strength	1.04 +	1.11	1.05 +	1.17	
leg strength	1.11 +	1.12	1.00 +	1.19	
flexibility	1.00 +	1.06	0.81 +	1.19	
endurance	0.68 +	1.07	0.76 +	1.25	
coordination	1.10 ++	1.07	0.87 +	1.12	
agility	1.40 ++	1.04	1.12 +	1.21	*
stability	1.02 +	1.04	1.00 +	1.27	
preferred hand	0.65 +	1.07	0.57	1.33	
skill level	0.92 ++	0.89	0.82 +	1.10	
<u>Mental attribute of judoist</u>					
personality	0.63 +	1.15	0.75 +	1.25	
judgment	0.92 +	1.07	0.85 +	1.20	
<u>Experience of judoist</u>					
results of past contests	1.09 ++	1.09	1.56 ++	1.13	**
amount of practice	1.03 +	1.07	1.08 +	1.15	
learning order of technique	0.42	1.20	0.30	1.40	

UC-judoists : university or collegiate judoists, JHS-judoists : junior high school judoists,

\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , +:  $0.5 \text{ SD} \leq \text{Mean} < 1 \text{ SD}$ , ++:  $1 \text{ SD} \leq \text{Mean}$

経験要因に関する3要因においては、心理要因の場合と同様に大学柔道選手と中学柔道選手における関与の傾向が類似していたが、中学柔道選手における過去の試合成績の要因における値は大学柔道選手の値よりも統計的に有意に大きな値であった。この中学柔道選手の過去の試合成績の要因における値は43要因の中で最高値であった。

### 3. 投げ技の特性に関する要因における値と検定結果

投げ技の特性に関する13要因における平均値と標準偏差及び大学柔道選手と中学柔道選手間での

平均値の差異の検定結果は表4に示す通りである。大学柔道選手では13要因中11要因において0.5 SD以上の値が認められた。その内、攻め方、一本奪取の難易度、ポイント奪取の難易度、及び組み方の要因で1 SD以上の値が認められた。中学柔道選手では、13要因中10要因において0.5 SD以上の値が認められ、攻め方、一本奪取の難易度、ポイント奪取の難易度の3要因においては1 SD以上の値が得られた。大学柔道選手と中学柔道選手との間で関与の程度に差異が認められたのは、技の感触、崩し方、組み方、姿勢、技の美しさ、及

Table 4 Means and standard deviations for factors related to characteristic of technique

Category & factor	UC-judoists		JHS-judoists		t-test
	Mean	SD	Mean	SD	
<u>Characteristic of the technique</u>					
feeling of throwing	0.70 +	1.14	1.16 +	1.18	**
related injuries	0.22	1.02	0.11	1.05	
practice method	0.78 +	1.12	0.69 +	1.29	
way of breaking balance	0.84 +	0.95	0.56 +	1.08	*
way of attacking	1.21 ++	0.91	1.07 ++	1.03	
ways of counterattacking	0.70 +	0.98	0.62 +	1.15	
difficulty of scoring ippon	1.02 ++	1.00	1.18 ++	1.03	
difficulty of scoring points	1.29 ++	0.88	1.38 ++	1.01	
way of gripping	1.07 ++	1.05	0.61 +	1.18	**
fighting posture	0.89 +	0.96	0.57 +	1.13	**
appearance of throwing	0.19	1.10	0.55	1.33	**
combination with another technique	0.98 +	1.00	0.92 +	1.13	
difficulty of throwing	0.61 +	0.90	0.39	1.06	*

UC-judoists : university or collegiate judoists, JHS-judoists : junior high school judoists,  
\* $p<0.05$ , \*\* $p<0.01$ , +:  $0.5 \text{ SD} \leq \text{Mean} < 1 \text{ SD}$ , ++:  $1 \text{ SD} \leq \text{Mean}$

Table 5 Means and standard deviations for factors related to circumstance of judoist

Category & factor	UC-judoists		JHS-judoists		t-test
	Mean	SD	Mean	SD	
<u>Circumstance of judoist</u>					
advice of coach	1.12 ++	1.11	1.21 ++	1.21	
advice of teammates	0.77 +	1.07	0.77 +	1.25	
kinds of technique used by teammates	0.52 +	1.02	0.52	1.14	
body types of teammates	0.80 +	1.04	0.89 +	1.25	
skill level of teammates	0.66 +	1.11	0.60	1.24	
tradition of team	-0.22	1.07	-0.46	1.22	
influence of famous judoist	-0.09	1.11	0.15	1.28	

UC-judoists : university or collegiate judoists, JHS-judoists : junior high school judoists,  
\* $p<0.05$ , \*\* $p<0.01$ , +:  $0.5 \text{ SD} \leq \text{Mean} < 1 \text{ SD}$ , ++:  $1 \text{ SD} \leq \text{Mean}$

び技の難易度の要因においてであった。得意技として選択された投げ技の施技時の感触と投げ技の美しさの要因における値は中学柔道選手の方が大きかった。

#### 4. 柔道選手を取り巻く環境に關する要因における値と検定結果

柔道選手を取り巻く環境に關する7要因における平均値と標準偏差及び大学柔道選手と中学柔道選手間での平均値の差異の検定結果は表5に示す

通りである。大学柔道選手においては7要因中5要因で正の値が認められたが、学校・チームの伝統及び有名柔道選手の影響の要因では負の値が得られた。中学柔道選手においては、監督・コーチの助言、練習相手の助言、練習相手の体格の要因で0.5 SD以上の値が認められた。一方、学校・チームの伝統の要因では負の値が得られた。大学及び中学柔道選手間において、環境要因の關与の程度には統計的に有意な差異は認められなかった。

Table 6 Difference and relative change

Factor (Category)	Mean		$\Delta D$	R
	UC-judoists	JHS-judoists		
height (physique)	1.20	0.78	0.42	1.538
upper limb length (physique)	0.57	0.19	0.38	3.000
lower limb length (physique)	0.68	0.36	0.32	1.889
weight (physique)	0.63	0.38	0.25	1.658
agility (physical function)	1.40	1.12	0.28	1.250
results of past contests (experience)	1.09	1.56	-0.47	0.699
feeling of throwing (technique)	0.70	1.16	-0.46	0.603
way of breaking balance (technique)	0.84	0.56	0.28	1.500
way of gripping (technique)	1.07	0.61	0.46	1.754
fighting posture (technique)	0.89	0.57	0.32	1.561
appearance of throwing (technique)	0.19	0.55	-0.36	0.345
difficulty of throwing (technique)	0.61	0.39	0.22	1.564

UC-judoists : university or collegiate judoists, JHS-judoists : junior high school judoists,  
 $\Delta D$  :  $Mean(UC-judoists) - Mean(JHS-judoists)$ ,  $R$  :  $Mean(UC-judoists) \div Mean(JHS-judoists)$

#### 5. 大学及び中学柔道選手間で差異が認められた要因における増減量と変化率

表6は、大学及び中学柔道選手間で統計的に有意な差異が認められた12要因における平均値間の差異と比率を示したものである。カテゴリー別内訳は、柔道選手の特性に関する要因が6要因と投げ技の特性に関する要因が6要因であった。関与の程度が増加した要因は12要因中9要因であり減少した要因は3要因であった。増減量は絶対値で0.22～0.47の範囲の値であった。変化率において増加傾向を示した要因では、上肢長の要因における非常に大きな値(3.0)を除く8要因の値が約1.3～1.9倍の増加率を示していた。一方、減少した要因の値は約0.3～0.7倍の減少率を示していた。

#### IV 考察

##### 1. 大学及び中学柔道選手の投げ技における得意技の習得

大学柔道選手の投げ技における得意技の種類と割合を調べた先行研究<sup>20)</sup>によると、選択される割合が比較的大きな投げ技は、割合の大きな順に背負投、内股、大外刈、払腰、小内刈、体落、大内刈であった。上位4種類の投げ技とその順位は本研究の大学柔道選手の結果と一致していた。高校

柔道選手の場合<sup>20)</sup>にも上位を占める技には背負投、内股、大外刈が含まれていた。本研究の中学柔道選手の結果では背負投、内股が大きな割合を示していた。以上のことから、柔道の投げ技において得意技として習得される割合の大きな投げ技は、大学柔道選手と中学柔道選手において類似しており、技能水準にかかわらず背負投と内股が得意技として選択される割合が他の技に比べて大きいことが示唆された。しかしながら、習得される割合の程度は大学柔道選手と中学柔道選手において異なっていた。

最近、投げ技における得意技の種類と割合の男女差についての報告<sup>18)</sup>が認められ、男女の柔道選手において得意技として習得される投げ技の種類は類似しているが、得意技として習得される割合には性差が認められることが報告されている。したがって、得意技として習得される投げ技の種類は技能水準あるいは性別にかかわらず類似するが、習得される割合は柔道選手の技能水準や性別によって異なることが推測される。

習得される割合について、大学柔道選手において比較的大きな割合(10%以上)を示した投げ技は5種類(11～22%)であったのに対し、中学柔道選手では3種類(12～32%)であった。投げ技

における得意技の種類は経験年数の増加に伴い変化する<sup>6)</sup>ことが示唆されているため、得意技の習得過程においては得意技として習得される投げ技の種類が変化し、習得される割合が技能水準の向上に伴い均一化していくと考えられる。

## 2. 大学及び中学柔道選手における選手自身の特性の関与

体格特性に関する要因の内、大学及び中学柔道選手に共通して関与の程度が大きかったのは身長と体型であった。身長は従来から得意技の決定において重要な要因であることが指摘されており、異なる得意技を有する柔道選手の身長に差異が認められることが報告されている<sup>8,13,17)</sup>。また、ヒース・カーターの体型判定基準に基づいて分類された体型についても同様な報告<sup>23)</sup>が認められる。身長と体型は技能水準の差異にかかわらず得意技の習得において関与の程度が大きな要因であると推測される。

得意技の決定においては身体の末梢よりも体幹における体格特性の影響を受けることが示唆されている<sup>3)</sup>。中学柔道選手の結果はその結果と一致していた。しかし、大学柔道選手では、加えて体重、上肢長、下肢長の関与が認められ、その関与の程度は中学柔道選手よりも大きかった。中学柔道選手に比べて大学柔道選手においては関与の大きな要因の数が増加していることから、技能水準の向上に伴い体格特性における体幹の特性だけではなく体重や長育に関わる特性も得意技習得において考慮されるようになると考えられる。

柔道選手の機能要因の関与については、利き手の要因以外の全ての要因が大学及び中学柔道選手に共通して得意技の習得に關与することが示唆された。また、関与の程度には敏捷性の要因を除く全ての要因で差異が認められなかった。機能要因が得意技の習得に關与すること<sup>5,18)</sup>及び異なる得意技を有する柔道選手間で機能面に差異が認められることは先行研究でも報告されている<sup>4,10,22,24)</sup>。本研究の調査から、全体的には機能要因は得意技習得に關与し、その関与の程度は技能水準や経験年数による差異はないと推測される。このように機能要因は得意技の習得において全般的に考慮されることが推測されるため、適切な得意技を習得

させるためには、体力・運動能力テストを実施し、柔道選手自身が自己の体力・運動能力を正確に把握するように指導を行うべきであると考えられる。

また、大学柔道選手においては様々な要因の中でも敏捷性の要因の関与が最も大きかった。つまり、機能要因の中でも要因間で関与の程度に差異があり、敏捷な動きが可能かどうか大学柔道選手の場合には最も重要な要因として關与すると考えられる。

心理要因の関与については、本研究で選択した性格と判断力の要因が得意技の習得において關与することが認められ、技能水準や経験年数にかかわらず関与の程度は同程度であることが示唆された。このように得意技の習得に心理特性が關与することから、未だ得意技と心理特性との関係を調べた先行研究<sup>11,21)</sup>は少ないため、今後は得意技と心理特性との関与についてさらに検討を進めていく必要があると考えられる。

経験要因の関与の傾向は大学柔道選手と中学柔道選手との間で類似していた。したがって、技の学習順序以外の要因は技能水準や経験年数に関係なく得意技の習得に關与すると推測される。関与の程度に関しては、過去の試合成績の要因において両者に差異が認められ、中学柔道選手の方が大きな値を示していた。また、この過去の試合成績の要因における中学柔道選手の値は43要因の中で最高値であった。過去の試合成績が得意技の変更に關与することは大学及び高校柔道選手を対象とした研究<sup>9,20)</sup>で報告されている。以上のことから、中学生の段階では過去の試合成績の要因が得意技習得においては最も關与が大きいと考えられる。また、柔道選手自身の特性に関する要因の中で、最も關与の大きな要因が技能水準の向上に伴い過去の試合成績から敏捷性の要因に変化することが明らかになった。

さらに、大学及び中学柔道選手の間で関与の程度に差異が認められた要因の技能向上に伴う変化(表6)についてみると、体格、機能、経験に関する要因で差異が認められた。過去の試合成績以外の体格及び機能に関する要因においては関与の程度が増加していることから、技能水準の向上に伴い体格及び機能特性が得意技の選択におい

てより考慮されるようになると推測される。特に、上肢の長さは中学生の段階ではほとんど重要視されていないにも関わらず、大学生になるとその関与の程度が3倍に増加し関与の高い要因へ変化することが示唆された。一方、過去の試合成績は、減少傾向を示しているにもかかわらず、大学生の段階においても関与の非常に高い要因であることが明らかになった。

### 3. 大学及び中学柔道選手における投げ技の特性の関与

得意技として選択されるその投げ技に付随する特性に関する要因については、関与の傾向が大学及び中学柔道選手で類似しており、技能水準や経験年数にかかわらず関与する要因にはほとんど差異がないと推測される。関与の程度に関しては、その技の崩し方、組み方、姿勢、及びその技の難易度の要因の関与が大学柔道選手において中学柔道選手よりも大きかった。施技の容易さや崩しの容易さといった技の特性が大学柔道選手の得意技習得に関与することは以前に報告されている<sup>2)</sup>。一方、その技で投げた時の感触とその技の美しさ(見た目)の要因では中学柔道選手でより大きな関与が認められた。以上のことから、技の特性に関する諸要因については、得意技習得に関与する要因は類似しており技能水準にかかわらず試合成績の向上に関係する技特有の攻め方、一本やポイント奪取の難易度という要因が強く得意技の習得に関与することが明らかになった。しかし、関与の程度には技能水準及び経験年数の違いによる差異が認められ、大学柔道選手においては技術的要因の関与がより大きいものに対して、中学柔道選手では技の感触や美しさといった技術的要因とは余り関係のない要因が得意技の習得においてより関与する点で特徴的であった。

同様なことは、表6の6要因における技能水準の向上に伴う変化の分析からも認められた。つまり、崩し方、組み方、姿勢、技の難易度という技術的要因の関与は技能向上とともに高くなるが、技の感触や美しさといった技術的には直接関係のない要因は中学生から大学生にかけて得意技の選択において重要視されなくなることが示唆された。

### 4. 大学及び中学柔道選手における環境要因の関

与

環境要因に関しては、技能水準にかかわらず監督・コーチの助言が得意技習得において考慮されると推測される。先行研究でも指導者の助言が得意技習得において重要であることが大学及び高校柔道選手に関して報告されており<sup>5,19,20)</sup>、本研究でも中学柔道選手において指導者の助言が同様に関与することが示唆された。この要因に関しては、大学及び中学柔道選手において共通して非常に大きな関与が認められるため、適切な得意技を習得させるためには各柔道選手の種々の特性を理解し指導者が注意して助言を行うべきである。

環境要因の関与の程度には差異がみられず、学校・チームの伝統及び有名柔道選手の影響の要因を除く残りの要因では、得意技習得における関与の程度がほぼ同程度であった。つまり、柔道選手が所属するクラブや道場等の指導者の助言あるいは練習相手から受ける種々の影響の程度は、技能水準や経験年数に関係なく同程度であると推測される。一方、環境要因として本研究で選択された学校・チームの伝統及び有名選手の影響の要因は得意技習得においてほとんど考慮されないことが明らかとなった。

## V 要約

技能水準及び経験年数の異なる大学柔道選手333名と中学柔道選手97名を対象として、柔道の投げ技における得意技の習得に関与する要因について検討を行った。

得意技として習得される投げ技の種類とその割合の比較から、習得される投げ技の種類は技能水準や経験年数にかかわらず類似しているが習得される割合は異なり、技能水準の向上に伴い習得される割合における各技間の差が小さくなることが示唆された。

得意技習得における柔道選手自身の特性の関与に関して、体格特性の中では身長と体型が両者に共通して関与していた。さらに大学柔道選手では長育に関する特性を含むより多くの体格特性要因の関与が認められた。機能特性全般、心理特性、経験に関わる要因(技の学習順序を除く)は得意技習得において関与し、その関与の程度に技能水準及び経験年数の違いによる差異はほとんど認め



られなかった。得意技の習得に最も關与の大きな要因は柔道選手自身の特性に關する要因の中で得られた。つまり、その要因は大学及び中学柔道選手においてそれぞれ敏捷性と過去の試合成績であり、中学から大学にかけての得意技の習得過程において敏捷性と過去の試合成績の要因の關与の程度は変化すると考えられる。

技の特性に關する要因の中で、得意技の習得に關する要因は大学柔道選手と中学柔道選手で類似していたが、いくつかの項目では両者の間で關与の程度に差異があることが示唆された。特に、大学柔道選手では得意技の習得において崩し方、組み方、姿勢等の技術的特性が考慮されるのに対して、中学柔道選手では技術的特性と余り關係のない技の感触と技の美しさの要因の關与がより大きいことが特徴的であった。

環境要因に關しては、大学柔道選手と中学柔道選手の關与の傾向が類似しており關与の程度にも差異は認められなかった。技能水準や経験年数にかかわりなく指導者の助言が得意技の習得において重要な要因であることが示唆された。

## 注

本研究で用いた調査には、得意技選択に關する程度を43要因ごとに回答した後に、43要因の中で關与の程度が高いと考えられる上位3要因をさらに記述する項目が含まれていた。43要因における關与の程度の評価と上位3要因の回答を照合し、両回答に矛盾が認められた場合には、回答の信頼性が低いと推測されるため分析データから除外した。

## 文 献

- 1) 青柳 領, 梶山彦三郎, 竹内善徳, 中村良三, 小俣幸嗣: 柔道投げ技における得意技の統計学的構造, 体育学研究, 32, 241 - 248, 1988.
- 2) 青柳 領, 高野裕光, 横田三四郎: 柔道の得意技の獲得に關する要因について, 日本武道学会第25回大会プログラム, 57, 1992.
- 3) Aoyagi, O.: The relationship between the statistical structure of preferred throwing techniques of judo and fundamental physical fitness. Japan J. Phys. Educ., 39, 203 - 212, 1994.
- 4) 浅見高明: 柔道における技術的特性の科学的説明. 武道学研究, 11-2, 112 - 113, 1978.
- 5) 出村慎一, 村瀬智彦: 柔道における得意技選択に關連する要因分析. 金沢大学教育学部紀要(教育科学編), 38, 145 - 157, 1989.
- 6) 出村慎一, 井浦吉彦, 村瀬智彦: 運動技術の習得過程に關する研究-柔道の得意技変化の類型化-. 金沢大学教育学部教育工学研究, 15, 49-55, 1989.
- 7) 羽川伍郎: 柔道得意わざの指導に關する考察. 武道学研究, 2-2, 35-40, 1970.
- 8) 火箱保之, 藤猪省三, 平野嘉彦, 大谷崇正: 柔道の得意技についての研究 第1報 -柔道選手の得意技と体格について-, 日本体育学会第31回大会号, 666, 1980.
- 9) 五十嵐敬一, 金芳保之: 柔道の得意技に關する研究 その1 得意技の因子について. 体育学研究, 10-1, 88, 1965.
- 10) 五十嵐敬一, 金芳保之: 柔道の得意技に關する研究 その2 得意技と運動能力及び行動特性について. 体育学研究, 10-2, 275, 1966.
- 11) 五十嵐敬一, 金芳保之: 柔道の得意技に關する研究 3. 得意技と精神的特性について. 体育学研究, 11-5, 220, 1967.
- 12) 飯田頼男, 松井三雄, 吉本俊明: 柔道の動作分析-得意技と動作の変化について-. 体育学研究, 11-5, 80, 1967.
- 13) 岩田家正: 柔道の得意技と体格について. 日本体育学会第24回大会号, 346, 1973.
- 14) 金芳保之, 根木哲郎, 荻原郡次, 山中保人, 鶴田宏次, 出口庄佑: 柔道の得意技に關する研究 その4 得意技の筋電図学的解析. 体育学研究, 13-5, 280, 1969.
- 15) 講道館: 決定版講道館柔道. 講談社: 東京, 1995.
- 16) 村瀬智彦, 出村慎一, 徳田喜平, 勝木豊成: 柔道の投げ技における得意技と体格及び階級との關係. 北陸体育学会紀要, 24, 31-35, 1987.
- 17) 村瀬智彦, 出村慎一, 徳田喜平, 中比呂志: 柔道選手の体格に基づく得意技の判別. 日本体育学会第38回大会号, 770, 1987.
- 18) 村瀬智彦, 出村慎一, 井浦吉彦, 村松成司: 中学柔道選手の得意技習得に關する要因. 大阪武道学研究,

- 7-1, 1-8, 1996.
- 19) 榎木豊秀, 平沼正治, 松永郁男: 柔道における体格と得意技の研究. 武道学研究, 15-2, 8-9, 1982.
- 20) 尾形敬史, 根本 進: 柔道における得意技(投げ技)の研究. 茨城大学教育学部紀要, 27, 71-96, 1978.
- 21) 大谷崇正, 火箱保之, 藤猪省太, 平野嘉彦, 花田敬一: 柔道の得意技についての研究 第3報 -柔道選手の得意技と性格について-. 日本体育学会第32回大会号, 635, 1981.
- 22) 田中秀幸: 柔道の投げ技について(3) -得意技別にみた平衡能力について-. 静岡大学教養部研究報告(自然科学篇), 7, 119-145, 1971.
- 23) 藪根敏和, 川村禎三, 浅見高明, 竹内善徳, 中村良三, 石島 繁, 松井 勲: 得意技, 階級別に見た柔道選手の形態的, 姿勢的特徴について. 武道学研究, 15-2, 129-130, 1982.
- 24) 吉岡 剛, 青柳 領, 菅波盛雄, 武内政幸, 上口孝文, 大嵩崎日出夫, 飯田頼男: 柔道選手の得意技と体力の構造との関連について. 武道学研究, 16-1, 146-147, 1984.

## FACTORS AFFECTING ACQUISITION OF A FAVORITE THROWING TECHNIQUE IN UNIVERSITY OR COLLEGIATE AND JUNIOR HIGH SCHOOL JUDOISTS

**Tomohiko MURASE** (Faculty of Health and Sport Sciences, Osaka University)  
**Shinichi DEMURA** (Faculty of Education, Kanazawa University)  
**Yoshihiko IURA** (Faculty of Education, Kanazawa University)  
**Shigeji MURAMATSU** (Faculty of Education, Chiba University)  
**Takaaki ASAMI** (Institute of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba)

The present study investigated factors affecting the acquisition of a favorite throwing technique “*tokui-waza*” in judo and determined factors influencing the choice. A questionnaire was used to survey 333 university or collegiate judoists (UC-judoists) and 97 junior high school judoists (JHS-judoists). The subjects provided the name of their favorite throwing technique and indicated the degree of influence on the acquisition of this technique for each of 43 factors related to the attributes of the judoist, characteristics of the throwing technique, and circumstances of the judoist. The names and the percentage of favorite throwing techniques for UC- and JHS-judoists were determined and compared between the two judoist groups. Among the physique attributes of the judoist, height and body type of the judoist were important factors for both UC- and JHS-judoists. In general, the factors related to functional and mental attributes and the experience of the judoist influenced the selection of a favorite throwing techniques, and there was little difference in the degree of influence between UC- and JHS-judoists. The most important factors for UC- and JHS-judoists were agility and results of past contests, respectively. Although factors related to the characteristics of the throwing technique influencing the acquisition of favorite techniques were similar for UC- and JHS-judoists, unpaired t-test revealed that the degrees of influence were different for some factors between the two judoist groups. The UC-judoists tended to consider technical characteristics when selecting a favorite throwing technique, whereas the feeling of throwing and appearance of throwing rather than technical characteristics may contribute to the choice for JHS-judoists. With respect to circumstances of the judoist, it was suggested that the factors and degree of influence were similar regardless of the skill level and experience of the judoist. Especially, the advice of the manager or coach was an important factor in selecting favorite throwing techniques for both UC- and JHS-judoists.